

風車

紀州の歴史と文化の風

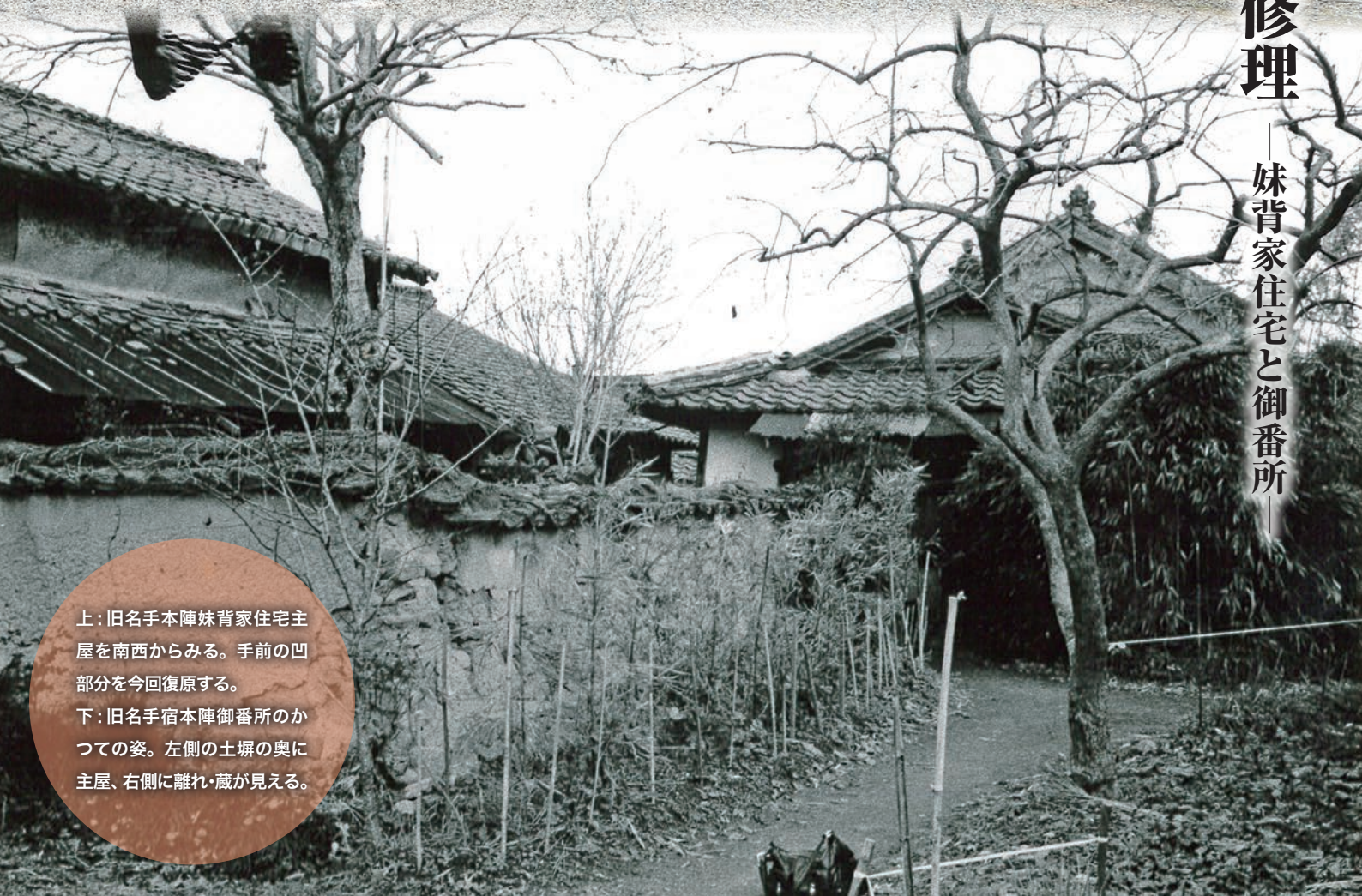
文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2018 春号 **82**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 旧名手本陣の保存修理

妹背家住宅と御番所



上：旧名手本陣妹背家住宅主屋を南西からみる。手前の凹部分を今回復原する。

下：旧名手宿本陣御番所のかつての姿。左側の土塀の奥に主屋、右側に離れ・蔵が見える。

特集 旧名手本陣の保存修理

妹背家住宅と御番所

〔紀の川市名手市場に所在する旧名手本陣では重要文化財に指定されている「旧名手本陣妹背家住宅」の保存修理事業と、国指定史跡「旧名手宿本陣」である同敷地内の北側に近年まで存在した「御番所」の復旧事業が実施されています。本特集では当センターが関わっているこれらの事業について紹介します。〕

重要文化財（建造物） 旧名手本陣 妹背家住宅主屋及び米蔵保存修理事業

妹背家住宅の概要

旧名手本陣妹背家住宅はその名の通り、江戸時代は紀州藩主が立ち寄る「本陣」でした。妹背家の起源は古く中世にまで遡り、この地の豪族だったようです。元和五年（一六一九）に徳川頼宣が紀州封入後、地士として取りたてられて地士頭の扱いを受け、元和八年に本陣となり、寛永一六年（一六三九）には大庄屋に任じられました。大庄屋は組（名手組は一九か村から構成される）を統率し、郡奉行や代官の補佐的な役割を果たしたようです。具体的には、組内の争い事の仲裁や、年貢徴収の責任者、戸籍管理などを行っていました。また、本陣としては鷹狩りの際に藩主が休息を取られたとの記録が残ります。

敷地内に現存する建物は主屋と米蔵、南倉

があり、この三棟が国の重要文化財に指定されています。主屋は普段の生活で使用する「居室部」が正面（南）側にあり、そこから御成の際に使用する「座敷部」が北東に突き出す形で構成されています。記録によると、正徳四年（一七一四）に市場村で発生した火災により敷地内の建物が全て類焼した後、享保三年（一七一八）に主屋の現在の居室部が建てられ、延享三年（一七四六）に座敷部が増築されていることが判ります。米蔵と南倉もこの頃の建築とされています。その後、居住する実情に合わせて様々な箇所が増改築されてきましたが、昭和四四年に文化財の指定を受けた頃にはお住まいされていなかったようで、建物の荒廃が進んでいました。そこで昭和五九年から平成四年の間に文化財修理事業が実施され、その際、建物全体の景観が整った延享三年頃の姿に戻すべく、近年の改変・増築部分や近代的な設備などが取り除かれ

ました。このような復原は、当時既に無住となっていたことで実施可能となったと言えます。その後、建物は那賀町（現紀の川市）に寄贈され、現在は一般に公開されています。

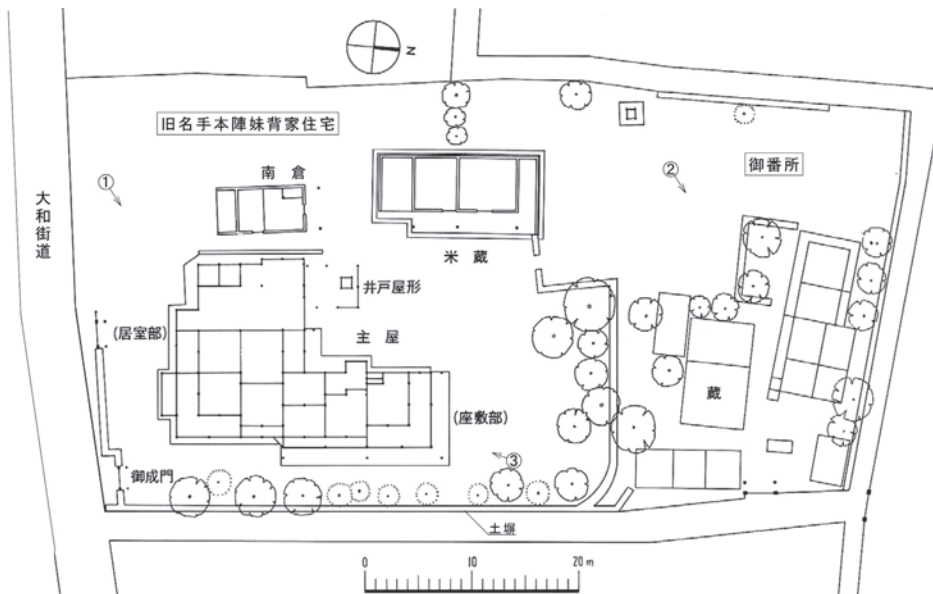


図1 旧名手本陣配置図 写真撮影位置：①表紙上、②表紙下、③写真1

修理事業について

今回の修理事業の目的は大きくわけて三つあります。一つめは、前回の修理から二五年が経過したことによって破損が進行した箇所^{しゅうぜん}の修繕^{しゅうぜん}です。具体的には、主屋座敷部の北面と東面に設けられた「こけら葺き」の土庇^{つちひさ}の葺き替えや、主屋土間に設置された流し台の周囲や米蔵外壁の板壁など、水がかかつて木部が腐朽^{ふきゅう}した箇所^{箇所}の補修があります。これらについては悪くなった箇所のみ分解し取り替える、部分解体修理を行います。

二つめは、前回修理時にできなかった箇所^{箇所}の復元です。前述の通り、建物は江戸時代に建てられた当時の姿に復元されましたが、主屋の南西には昭和初期頃に貸家が建てられており、その際に主屋の一部が欠き取られていました。前回修理時は貸家との兼ね合いもあり元に戻せなかったようです。その後、現在までに貸家の撤去や敷地の整備が進んだこともあり、今回復元することとなりました。そのため、再度詳細な調査を行い、元の姿を想定した「復元図」を作成し、文化庁の許可を受けました。

最後は、耐震診断と耐震補強工事です。ここで改めて説明するまでもなく、文化財といえども耐震性の確保は重要な課題となっています。特に本建物は常時一般開放している建

物なので、地震発生時に来館者の生命を守る必要があります。本事業ではまず建物固有の性質や架構^{かこう}などを調査し、解析^{かいせき}を行った上で、地震動が入力された場合の建物の揺れ方を想定します。そして破損が予想される箇所や構造的に弱い部分に補強を行い、地震が起きても建物が倒壊しないように対処します。ただし、補強はもちろん大事ですが、文化財的な価値を損なわないような配慮も重要になります。壁がなくて開放的な空間はとも気持ちは良く、建物の特徴にもなりますが、耐震性

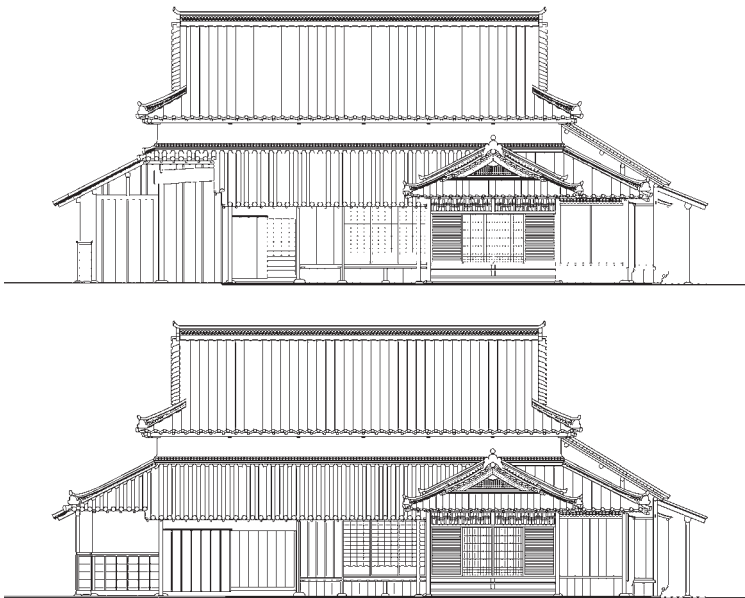


図2(上) 修理前正面図、図3(下) 復元正面図



写真1 座敷部を北東からみる
北、東面にはこけら葺き(解体済み)の土庇がつき、室内は開放的な縁が廻る。

能を考えると非常に厳しい。このような背反する事項をどのように解決するのか、頭を悩ませられます。

本事業は平成二九年四月から三二年三月までの二四ヶ月の予定で実施されています。二九年度は上記のうち主に準備工事や申請、診断などを行っており、本格的な工事が始まるのは来年度以降となります。今号では内容の詳細までお伝え出来ないのが残念ですが、折を見てこの誌面にてお伝えしたいと思います。

国指定史跡旧名手宿本陣御番所 復旧整備事業

御番所の概要

史跡旧名手宿本陣の敷地には、中央北寄りの位置を土塀が東西に横断するように築かれており、南側は妹背家住宅主屋ほか二棟が建つ敷地、北側は御番所の敷地となっており。大庄屋、本陣である妹背家住宅と、役所である御番所が同一敷地内に総体としてよく残っていることは全国的にも珍しく、高い評価を受けています。

御番所は記録によると「名手役所」とも呼ばれ、近年は「郡役所」の名称で知られていました。江戸期の名手組は上那賀郡に属していましたが、粉河組と共に伊都郡の支配下に置かれていたようで、御番所は郡奉行の補助的な機能を持っていたと考えられます。しかし、具体的にどのような役割や機能を持ち、建物がどのように使われていたのか、また大庄屋との機能の棲み分けなど、詳しいことはよくわかっていません。ただ、御白州と思われる空間が存在することから、何らかの裁きや通達などが行われた可能性があります。

時代が明治に移ると「派出駐在所」として使用されていたようで、その後貸し家となっていたのですが、徐々に荒廃してきたところ、修

理を行うため平成九年に建物が一旦解体されました。部材は仮設の倉庫に保管されていたものの、不運なことに長らく再建できずにいました。

事業の概要

今回、様々な状況が整い、二〇年越しに御番所の復旧事業が再開されました。手始めに建物の基本的な大きさや形、仕様や意匠などを決める基本設計を当センターが受託しました。というのも、解体時に調査はされていたものの、正確な図面がないためです。また、解体後から現在までに部材が移動されていたため、それぞれの部材がどこに使用されていたものか特定しなければならず、また欠失している部材なども確認する必要があります。さらには、今回の復旧は江戸時代後期の姿を目指して行いますが、解体直前の状況では様々な改変が行われていたため、それらを取り除いて復元的に検討する必要があります。

今回復旧する建物は主屋と、蔵に部屋がくつついた離れ・蔵、そして脇門の三棟です。その他にも建物がありました。近年のものなので今回は復旧しません。主屋は非常に変わった建物で、一見すると一つの建物なのですが、実際には東西二つの建物がくつついて建っており、それぞれが構造的に独立していることが判りました。これは半分ずつ順番に



写真2 現在の御番所の状況 表紙写真（下）と同位置より撮影

建て替えられたことが原因なのですが、なぜそうされたかは判りません。離れ・蔵は、解体前は既に蔵が崩壊していたこともあり、部材の残りが少ない状況でしたが、幸い主要な部材は僅かながら残存していたので、かつての姿を推定することが出来ました。

解体されたのが二〇年前なので、在りし日の記憶がある方は少ないかもしれませんが、復旧されると一気に時代が遡り、江戸時代の景観がよみがえります。その時に作り物ではなく、少しでも「懐かしいな」といった感覚をもってもらうために、出来るだけ元の部材を再用する予定です。

（結城 啓司）

コラム

御番所主屋の墨書

— 番付から分かったこと —

御番所主屋の部材を実測していると、墨書がたくさん見つかりました。今回はその中から、一番多く見つかった「番付」の墨書を紹介したいと思います。

柱や差鴨居などの軸組には、図4のように、柱の位置に「壹、貳、三…」と順番に数字が書かれた「廻り番付」の墨書がありました。「居住部」「役所部」とともに、居室の後、下屋部分に時計回りに番付が振られています。御番所主屋は居住部と役所部が別々に建てられており、それぞれの建物に対応する廻り番付が振られていました。

また、梁や母屋などの小屋組には、梁間方向に「いろは文字」、桁行方向に「数字」を振り分けた「組み合わせ番付」の墨書がありました。こちらも居住部は「は一」、役所部は「はノ一」と、同じ番付が建物ごとに違う表現で書かれています。(写真3〜6参照)

今回の調査で見つかった番付の墨書からも、それぞれの建物の違いが分かった事が面白いと思えました。

余談ですが番付には「又」というモノが



墨書写真(写真3~6) チョークは解体番付
居住部：(右上)「に弐」、(右下)「に一」
役所部：(左上)「にノ弐」、(左下)「にノ壹」

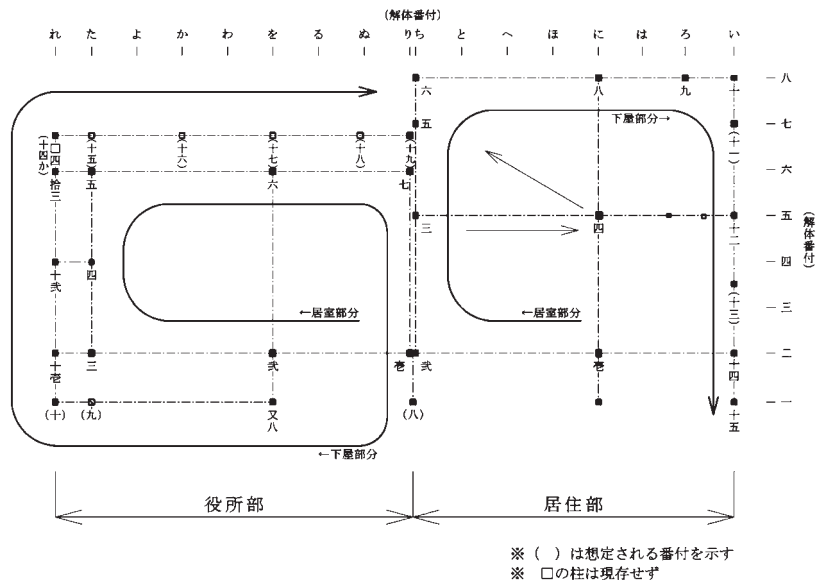


図4 御番所主屋の軸部廻り番付見取り図
柱、差鴨居、梁・桁と柱との取り付け部分の墨書を元に作成。

用語解説

存在し、例えば、「五」と「六」の間だと「又五」と表記されます。今回、役所部の廻り番付の全容が判明するまで、微妙に柱の数が合わない…と悩ましい感じでしたが、「又八」の墨書を発見してスッキリ解決しました。

(松井 美香)

- ほんじん「本陣」：旧宿駅などで、大名や幕府役人・公家等が宿泊または休憩する公的施設「m」
- ふくげん「復原」：一度失われたか、改造を受けた建築部分などを、実在時または新築時の状態に再現する過程「d」
- こけら葺き：厚さ一分(三mm)の薄板で葺いた屋根、または葺くこと「d」
- ごばんしょ「御番所」：江戸時代における町奉行の役宅のこと。町奉行の官舎である政庁である「d」
- しらす「白州」：江戸時代に奉行所、代官所などの裁判用の建物前において白石の敷いてある所。ここに農民、商職人、町医者、足軽、浪人などを座らせ罪状の糾問または訴訟の裁断をする「d」

出典

- m…日本民家語彙解説辞典(紀伊國屋書店)
- d…建築大辞典 第2版(彰国社)



和歌山城跡発掘調査現場から

— 砂で埋没した畑遺構 —

現在、当文化財センターでは、和歌山県の委託をうけて和歌山城跡の発掘調査を実施しています。調査地は和歌山城の北側に位置する旧伏虎中学校跡地で、業務は県立医科大学薬学部新設に伴うものです。調査

面積は約4000㎡、調査対象となる遺構面は最大で9面を数え、内訳は江戸時代が4面、織豊期を含む中世以前が5面で、地表下約4m（標高約1m）まで掘り下げの見込みです。現地調査は昨年11月末から今年12月の予定で実施しています。

調査区は1～4区の4区画に分かれ、1区と2区、3区と4区を反転して調査することになっています。現在は1区と3区の調査を行っています。比較的調査が進行している1区で見つかった畑遺構について説明します。

現地の地盤高は約5mで、基本的な層序は、江戸時代以降現在まで約2mに亘る整地面

が累々とあり、その下は自然（風成）堆積した砂層（最大厚0.6m）の下に16世紀末頃の遺構面、さらに自然（氾濫）堆積した砂層の下に鎌倉時代以前の遺構面が存在します。畑遺構は、16世紀末頃と考えられる遺構面から砂で埋没した状態で見つかりました。

畑遺構の畝には南北方向と東西方向のものがあり、間隔は約1.2mで、長さは東西方向のもので7mを測ります。畑の畝下からは井戸や土坑などがみつかり、屋敷地から畑に変遷したことが窺えます。

和歌山城は紀州徳川家の居城として知られますが、江戸時代の初め頃は浅野氏の居城で、さらにそれ以前の16世紀末頃には桑山氏が城代を務めていました。桑山期の調査地付近の様子は文献史料からは窺うことはできませんが、16世紀末頃の桑山期と考えられる遺構面からの出土遺物には、中国製白磁や染付などの



調査区の位置：手前の調査区（北東から）



みつかった畑遺構（西から）

高級品が多いことから、比較的高位な人々の屋敷地であったことが窺えます。和歌山城は桑山―浅野―徳川と切れ目なく変遷したといわれますが、城下では自然堆積した砂層が示すように、江戸時代が始まる前後に断絶期が存在した可能性が考えられます。また、畝方向が当時の地割を反映するものである場合、ほぼ東西南北の正方位に地割する江戸時代に比べ、桑山期は北方位がやや西偏していたと考えられます。

（川崎雅史）

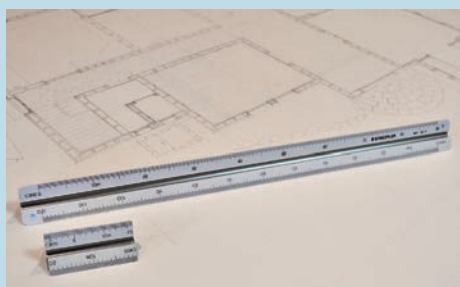
三角スケールという、ものさしがあります。建築物を縮小して描く場合に、スケールの縮尺目盛で寸法を読み取り、図面を描くことが出来る大変便利な道具です。三角形それぞれの面には、一般的に百分の一から六百分の一という六種類の目盛が付いています。

文化財建造物の修理事業では、A0判（A4判十六枚分）のケント紙に手描きで製図する「保存図」という修理記録の図面を製作します。保存図に、現場調査で考察した建物の計画寸法を反映させる時に、どの縮尺に合わせて描けば図面を見る人たちに建物の特徴を正確に示すことが出来るのか考えた後、三角スケールを使って縮尺図面を描きだします。現在はパソコン上でCADソフトを使って製図することが多くなりましたが、保存図だけは別です。自分の手を動かして実際の建物寸法にならない、図面として仕上げていくために三角スケールが必要になってきます。

私が持っている三角スケールは、建築学科に入学したときに購入したもので、十年以上愛用しています。長さは三十センチで一般的なものですが、それとセットで五センチの副尺が付いていました。

製図では主に三十センチの長尺スケールを用いて寸法確認し、副尺は携帯出来るので現場での図面確認にも使用して、用途によって使い分けられています。

（大給友樹）



三角スケールと製作中の図面

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

陶磁器

埋蔵文化財課

私たちの日常生活に陶磁器が密接に関わっていることは、誰しもが実感していると思います。日々の食事に使用する食器、生活環境における花瓶や置物に散見されます。陶磁器は、「陶器」と「磁器」の主原料の違う焼き物の合成語です。

陶器は粘土を成形し、800～1250度の温度で焼かれます。器面は暖かみのある土味を醸し出しており、敲けば鈍い音を発します。日本では、平安時代末から安土桃山時代にかけて日本全国に名を馳せた備前窯、信楽窯、丹波窯、常滑窯、瀬戸窯、越前窯といった焼物の産地があり、主に大型品（甕・壺・すり鉢など）である焼締陶器を焼いていました。これらの窯は、中世六古窯の名称で知られています。一方、磁器は、江戸時代になるまで日本には焼成技術がなく、中国からの輸入に頼っていました。ようやく磁器が日本で焼成できるようになるのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に陶工を朝鮮から連れてきたことを契機に、李參平が有田の地でカオリナイトと呼ばれる粘土鉱石、いわゆる磁土を発見し磁器焼成の成功を待たなければなりません。磁器の焼成温度は、陶器より100度程度高く、割れ口が鋭利で「チーン」と高い音がします。皆さんも食事の時は、これは陶器、これは磁器と器に着目しながら料理を味わってみてください。



写真1 瀬戸美濃系陶器(織部焼)



写真2 肥前系染付磁器「稜花鉢」

挿図写真
「和歌山城跡―和歌山地方合同庁舎新築に伴う発掘調査
2016年3月から転載

1970年代の名曲の冒頭に『真つ白な陶磁器を…』というフレーズがありますが、斯く言う私もその時は何気なく聴き流していた一人です。作詞家は有名なヒットメーカーですから、作詞上の語呂合わせですすね。もっと想像を逞しくすれば、眺めていたのは白磁の壺と勝手に推測しています。

（佐伯和也）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2018年春～2018年夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展 「鏃と剣～弥生時代と古墳時代の戦い～」

2018年 3月24日(土)～5月13日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展 「きのくに 縁起絵巻の世界 — 開かれる秘密の物語 —」

2018年 3月10日(土)～4月15日(日)

- 特別展 「紀伊徳川家 やきもの新時代 — 富国と栄華の一九世紀 —」

2018年 4月21日(土)～6月3日(日)

- 企画展 「博物館でいきものめぐり」

2018年 6月9日(土)～7月8日(日)

和歌山市立博物館

- 企画展 「和歌の浦には名所がござる」

2018年 4月21日(土)～6月3日(日)

掲載内容は、変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「旧名手本陣の保存修理 —妹背家住宅と御番所—」
写真上：旧名手本陣妹背家住宅 主屋
写真下：旧名手宿本陣 御番所主屋（昭和期）
- 2 特集「旧名手本陣の保存修理 —妹背家住宅と御番所—」
- 6 埋蔵文化財 短信「和歌山城跡発掘調査現場から —砂で埋没した畑遺構—」
- 7 きのくに歴史小話「三角スケール」
「陶磁器」
- 8 催し物案内



風車82 (2018・春号)

平成30年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

kanri-2@wabunse.or.jp